

平成19年度

教師海外研修

報告書

【派遣国：バングラデシュ】

JICA LIBRARY



1195820 [4]

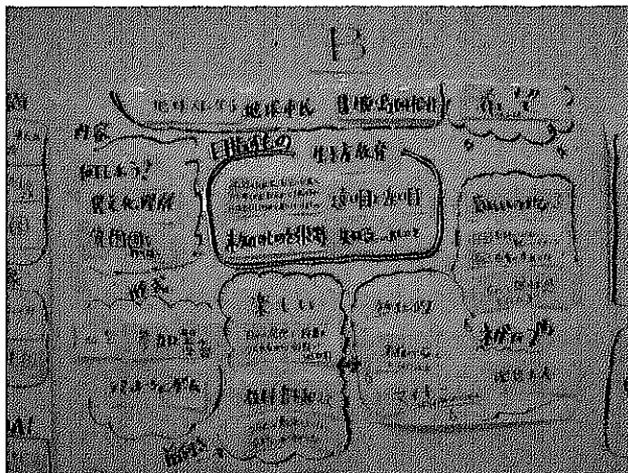
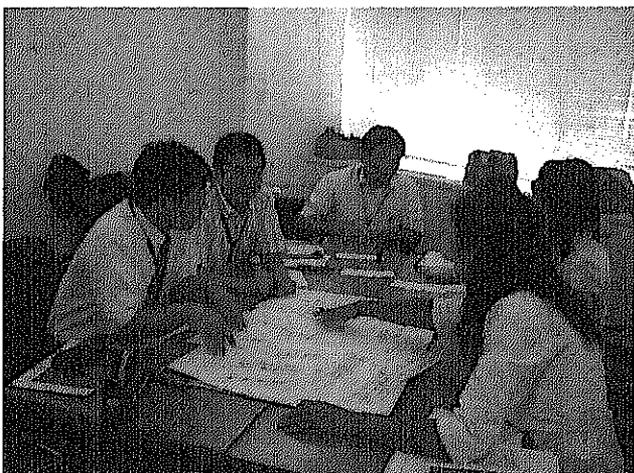
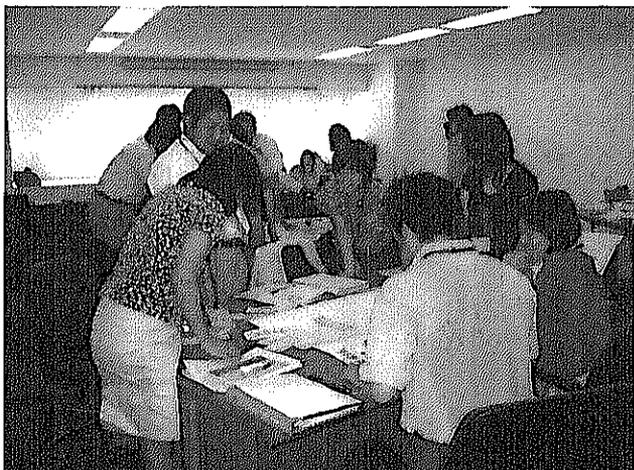


独立行政法人 国際協力機構 東北支部

東北支

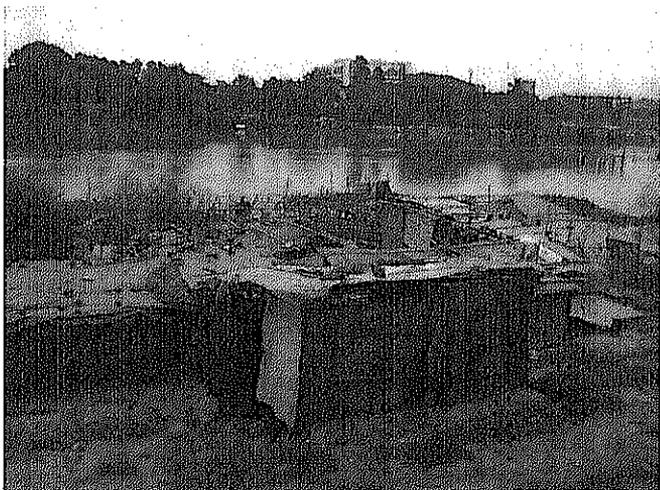
J R

国内研修

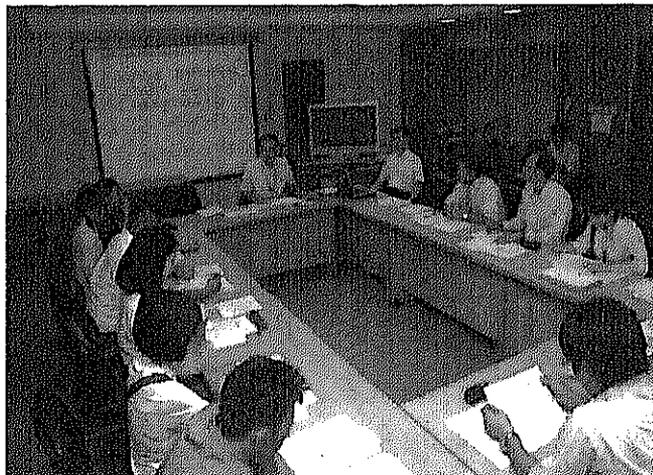


海外研修後の授業実践プランや授業作りのポイントについて、話し合う研修参加者のみなさん

海外研修



ノルシンディ県からダッカ市内に帰る途中の洪水の様子



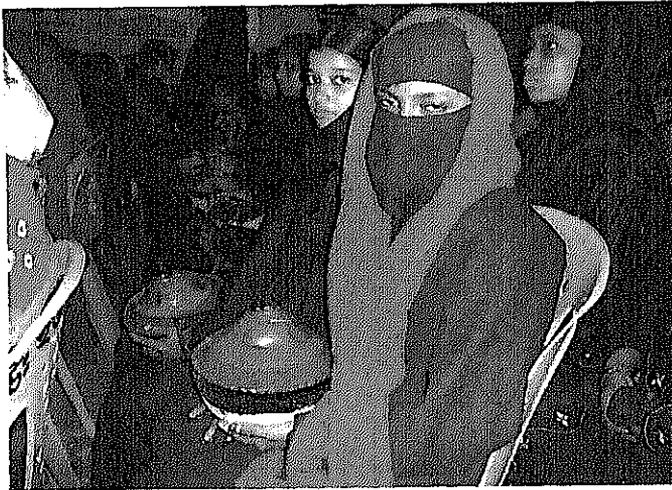
JICA バングラデシュ事務所



PAPRI 最貧困層グループ



妊産婦のための地域セッション



母子福祉センター



PAPRI マイクロクレジットグループ



ダッカ市内公立小学校訪問

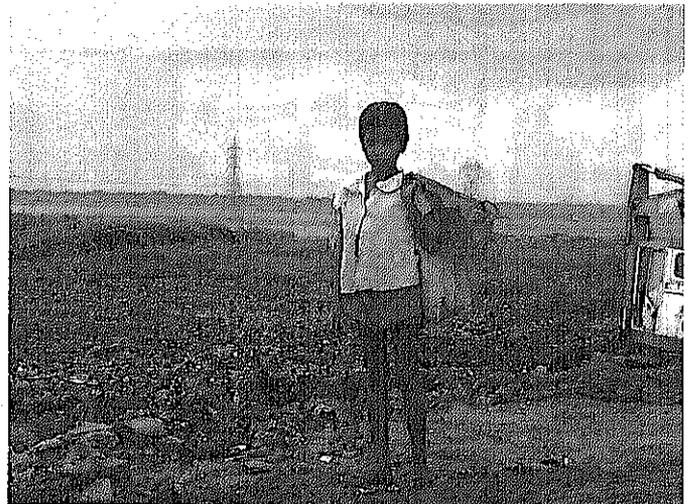


青空教室

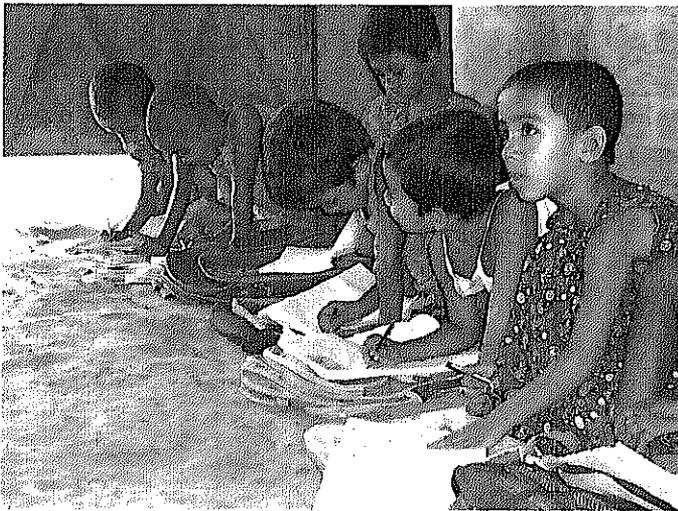




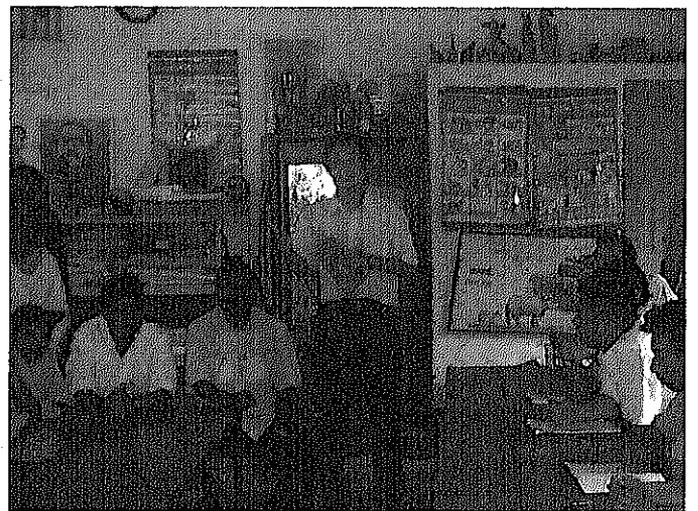
クリーナーズ コロニー



廃棄物処理場



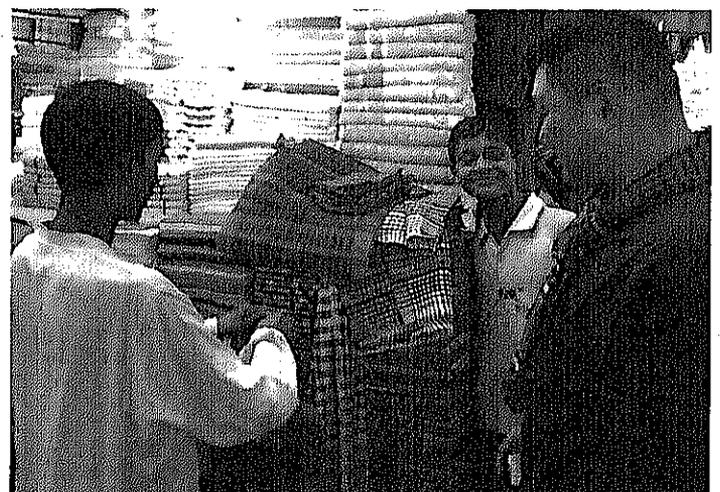
土の上に座り、一生懸命学ぶ



現地教員との座談会。写真中央が猪俣隊員

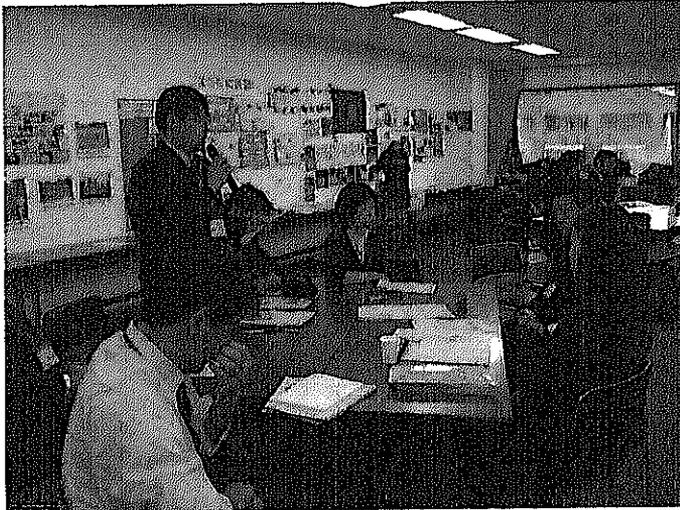


別れ~かけがえのない思い出を胸に~



ニューマーケットで文化祭に販売するガムチャ(てぬぐい)を購入

実践報告会



それぞれの実践報告の様子、
教材の共有や、教育現場において国際理解教育を実施するにあたっての問題点の話し合いも行われた。

目次

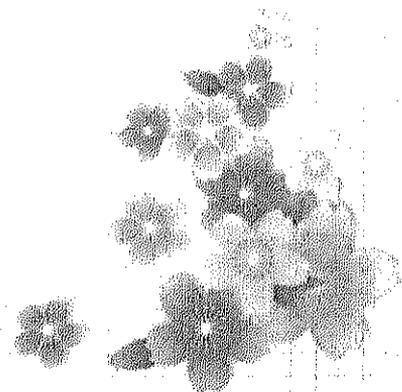
写真集

- 1、教師海外研修の概要 はじめに/年間スケジュール・・・・・・・・・・・・・1
- 2、研修日程詳細コラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- 3、実践報告書
- 佐藤 賢治 教諭 /岩手県 川井村立江繋小学校・・・・・・・・・・・・・15
・幸福を考える ～バングラデシュとわたしたち～
- 竹田 朋彦 教諭 /福島県 福島市立松川小学校・・・・・・・・・・・・・37
・地球の輪をつなげよう
- 松本 大光 教諭 /福島県 福島市立湯野小学校・・・・・・・・・・・・・51
・世界を知り、自分と他とのかかわりを見つめ直す
～新しい単元開発と参加型学習の実践を通して～
- 吉野 ひな子 教諭 /福島県 郡山市立日和田中学校・・・・・・・・・・・・・69
・Try to be the only one
- 馬場 由佳子 教諭 /福島県 福島県立富岡養護学校・・・・・・・・・・・・・76
・ドンノバード(ありがとう)! バングラデシュ
- 張間 亮 教諭 /青森県 青森県立青森商業高等学校・・・・・・・・・・・・・89
・文化祭におけるバングラデシュ物産展の実践
～模擬店成功の手段としての開発教育～
- 川村 ゆう子 実習助手 /岩手県 岩手県立花巻農業高等学校・・・・・・111
・家庭の窓から世界を見る
バングラデシュの“カレ～”な食文化
- 三浦 克洋 教諭 /宮城県 宮城県立古川工業高等学校・・・・・・・・・・・・・124
・バングラデシュのコンクリート粗骨材について
- 武田 重信 教諭 /福島県 福島県立福島東高等学校・・・・・・・・・・・・・150
・しげのぷうのせかいはおもしろい!



1、教師海外研修の概要

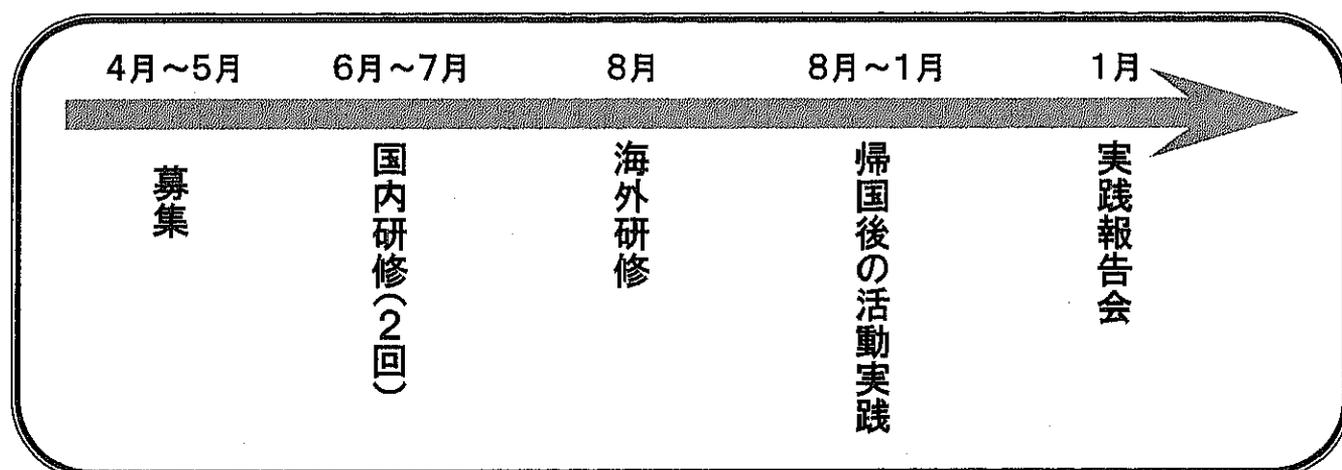
はじめに／年間スケジュール



はじめに

JICA 東北支部では、2007年8月、小学校・中学校・高等学校など、学校教育現場の先生方を対象に、開発途上国における国際協力の現場を視察する海外研修を行いました。本研修は、2度の国内事前研修、海外研修、事後研修を通して、日本との関係や国際協力への理解を深め、その成果を次代を担う児童生徒の教育に役立てていけるよう、学校、地域の現場でご活用頂くことを目的として実施されています。

年間スケジュール



※国内研修はウガンダ派遣・ Bangladesh派遣(JICA 東北・JICA 二本松)合同開催

国内第1次研修 平成19年6月29日(金)～6月30日(土)

- 目的： ①参加者間の情報共有と、渡航上の留意事項や日程概要に係る情報共有
②帰国後の実践に向けての具体的なイメージ把握のための実践事例紹介
③帰国後の継続的な国際理解教育実践に向けた“つながり”の機会の共有

場所：仙台第一生命タワービル11F、15F (JICA 東北) /宮城県仙台市

- 内容： ①JICA 事業概要説明 (開発教育支援事業)
②研修全体の流れ
③派遣国概要、派遣国に共有する課題
④海外研修日程及び訪問先について
⑤渡航手続き、渡航上の諸注意
⑥過年度研修参加者からのアドバイス
⑦過年度参加者の実践事例紹介
⑧実践プラン検討・発表



国内第2次研修 平成19年7月27日(金)～7月28日(土)

- 目的： ①渡航直前時点における日程等の最終確認と参加者間の情報共有と打ち合わせ
②帰国後の実践に向けての具体的なイメージ把握のための、派遣国における課題の背景をつかんだ実践事例の紹介。
③帰国後の継続的な国際理解教育実践に向けた効果的な手法の紹介

場所：仙台第一生命タワービル11F、15F（JICA 東北）/宮城県仙台市

- 内容： ①開発教育概論～体験を通して～
②バングラデシュ、ウガンダの農村社会とその背景について
③授業づくりのポイント
④授業づくり、発表
⑤ウガンダ派遣チーム、バングラデシュ派遣チーム、それぞれにエール交換



海外研修

平成19年8月1日(水)～8月11日(土)

詳細はコラムご参照

実践報告会

平成19年1月25日(金)～1月26日(土)

- 目的： 各教員が取り組んだ国際理解教育/開発教育の実践の児童生徒への効果・実践事例・有効な教材を共有する。

場所：三井アーバンホテル 2F/仙台第一生命タワービル11F、15F（JICA 東北）/宮城県仙台市

- 内容： ①派遣国紹介
②実践報告/質疑応答
③教科・校種別分科会（それぞれの学校現場における具体的実践の可能性）
④県別分科会（東北6県における国際理解教育各県ごとの取り組み）





2、海外研修日程表/コラム

～現場で何を見て、何を感じたのか～



海外研修日程表

研修国: バングラデシュ人民共和国

研修期間: 8月9日(木)~8月18日(土)

首都: ダッカ

面積: 14.4 万平方キロメートル(北海道の 1.7 倍)

人口: 1 億 4,182.2 万人('05)

民族: ベンガル人

言語: ベンガル語

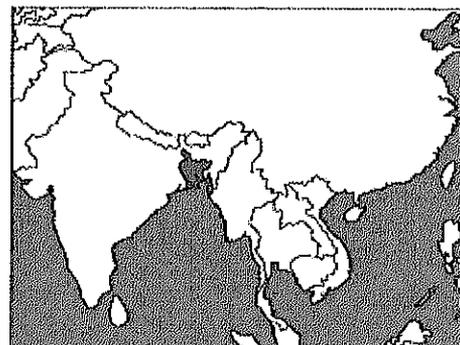
1 人あたり国民総所得(GNI): 約 470 米ドル(日本の約 85 分の 1)

成人識字率: 男 50.3%、女 31.4%('05)

妊産婦死亡率: 380 人/10 万人

乳児死亡率: 54 人/1000 人('05)

平均寿命: 男 62 歳、女 63 歳('00~'05)



<スケジュール>

日順	日付	内容
1 日目	8 月 9 日(木)	成田→バンコク
2 日目	8 月 10 日(金)	バンコク→ダッカ→ホテル
		JICA 事業概要説明・教育セクター関係者との意見交換
3 日目	8 月 11 日(土)	【現地 NGO 視察】①PAPRI サイト訪問(1)
4 日目	8 月 12 日(日)	【現地 NGO 視察】①PAPRI(2)
		【JICA プロジェクト視察】母子保護サービス強化プロジェクト
5 日目	8 月 13 日(月)	【教育機関視察】ダッカ市内公立小学校
		【現地 NGO 視察】②シャブラニール
		【現地 NGO 視察】③オボロジェヨ・バングラデシュ
		【現地 NGO 視察】④エクマツラ
6 日目	8 月 14 日(火)	【JICA プロジェクト視察】ダッカ廃棄物管理能力強化プロジェクト
		【資料収集】①アーロン

7日目	8月15日(水)	【JOCV 活動視察】理数科教師隊員活動視察
8日目	8月16日(木)	【研修報告】日本大使館
		【資料収集】②ニューマーケット
		【懇親会】JICA 事務所員との懇親会
9日目	8月17日(金)	ホテル→ダッカ→バンコク→成田
10日目	8月18日(土)	成田着

海外研修コラム

平成19年8月9日(木)～8月18日(土)

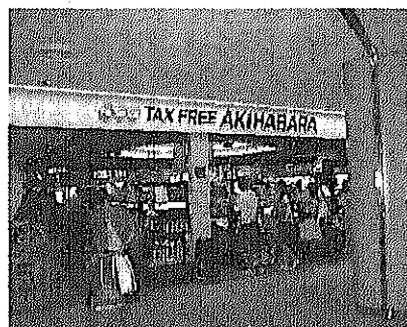
1日目 8月9日(木)

コラム提供:福島県立福島東高等学校 武田 重信 教諭

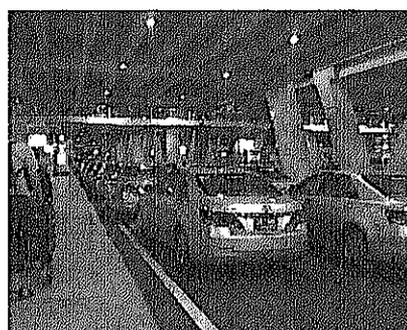
14:30、成田空港に「TEAM BANGLA」の12名が集結。期待と同時にもっと事前学習すべきだったと後悔する複雑な気持ちを抱きながら、いよいよバングラデシュに向けて出発！と、いきたいところだが、今日はタイのバンコクで1泊し、明日ダッカに入る予定だ。研修時よりも生き活きとしたみんなの表情から、気持ちはもうバングラデシュへ飛んでしまっているようだ。みんな大きなスーツケースを持ってきているが、自分だけキャリーバッグとリュックサック。「荷物は少なく」と思ったものの、早くも帰りのお土産の持ち帰りが気になってくる。どんな10日間が始まるのだろうか。

飛行機のチェックイン後、機内持ち込みの手荷物検査、そして出国手続き。出国手続きは、あっという間。日本人の出入国審査官のスピーディな対応にはいつも感心するが、今回ほど日本人の勤勉さ、正確さを感じた旅はないかもしれない。逆に言うとバングラデシュの時間に寛大で穏やかな国民性というのが羨ましくも感じられた。

出国手続き後は、搭乗ゲートに向かう。その途中には免税店が立ち並ぶ。日本の電化製品のお店もあり、日本人はもちろん外国人の姿も多い。その店の名は「AKIHABARA」。世界にその名をとどろかせる電気街。外国人の心ががっちり掴む素晴らしく、そしてわかりやすい名前だ。この後、バンコクの空港に降り立った際にも、日本のメーカーの自動車がとにかく目立っていた。もちろん現地生産車だがこうした点からも日本の工業製品の評価・信頼度の高さが伺える。



21:30、昨年9月にできたばかりのバンコク・スワンナプーム国際空港に無事到着。アジアのハブ空港だけあって成田空港よりもはるかに大きい。翌朝の渋滞を避けるために、空港から30分ほどのバンコク郊外に宿泊。広く新しい高速道路からは、スカイトレインの延伸工事や高層ホテルなどが見える。10年前、5年前よりも確実に近代化していくバンコクの変貌振りに驚かされるとともに、アジアのパワーを見せ付けられた。最貧国バングラデシュ(研修前のイメージ)もいつかこのように発展することができるのか、まだ見ぬバングラデシュに思いを馳せながら、夜は更けていくのであった。



2日目 8月10日(金)

コラム提供:福島県福島市立湯野小学校 松本 大光 教諭

研修2日目。移動中心だが、迫りくるバングラデシュに少しずつ緊張も高まる。空港、移動バス、そしてこの地

を歩く中で、バングラデシュの人々、文化に触れる機会が多くあった。

○ いよいよダッカへ(バンコク空港出発)

大規模で美しく、国際色豊かなバンコク空港でダッカ便を待つ中、サロワカミュージック(女性服)に身を包んだ3人のバングラデシュ女性に会った。我々の質問、撮影にも気軽に応じ、研修者それぞれが事前に学習したベンガル語での自己紹介等の会話を試す。写真入りの名刺、ベンガル語でのネームカード、会話文を書き綴ったメモ帳等を取り出しながら悪戦苦闘と興奮。



そんな中、「みんなあ、小技効いてない？」と張間先生の一言。まさに小技のオンパレードだった。

いよいよダッカ便出発。やがて、上空からバングラデシュ風景が見えてくる。一面に水が張り、田んぼのあぜ道のように区画の線だけが残る。“水の国”“洪水の国”と聞いてはいたが、まさかここまでとはと息をのんだ。もうすぐダッカ。相変わらず笑い声は絶えないが、少しずつ緊張感も張りつめてもいた。

○ ダッカ空港着 ～そこで見たもの～

空港を出てまず感じたものは、すさまじい人の数とクラクション音だ。フェンスの向こうにいくつもの層になった人々がこちらを見ている。案内の方の話によると、物乞いの人だけでなく、他国に(仕事で)行った家族の帰りを毎日空港に来て待っている人だという。複雑な気持ちで彼らに目をやりながらも、聞こえてくるのは騒々しいクラクションの音。日本では不愉快に聞こえるこの音が当たり前のようにどンドン耳に入ってきた。

○ バングラデシュ JICA 事業概要説明

午後3時、JICA 事務所を訪問する。JICA バングラデシュ事務所次長をはじめ、職員河田さん方々から、JICA 事業及びバングラデシュの概要について話をいただいた。

日本の明治維新に匹敵する政治的変化、大規模な自然災害、人口増加の中、着実な経済成長と貧困層の減少、保健・環境・教育を中心とした社会開発が改善されていること等の説明がなされ、研修者からも多くの質問が交わされた。



JICA バングラデシュ事務所

そんな中、気になる話を聞いた。『世界幸福度調査』で、日本が68位であるのに対し、バングラデシュは1位であるというのだ。この調査の指標、データについては言及できなかったが、新しい視点を投げかけられた思っていた。彼らを「幸せ」と感じさせるものは何なのだろうか？

明日からの視察に胸を膨らませ、2日目を終えた。

3日目 8月11日(土)

コラム提供:福島県福島市立松川小学校 竹田 朋彦 教諭

○いよいよ研修スタート

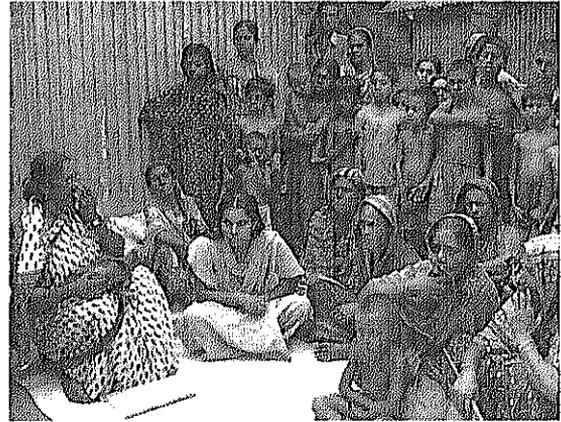
本日から本格的な研修がスタートである。特に今日はダッカを離れてノルシンディ県まで行くこととなる。参加者の面持ちも期待に満ち元気瀧刺だった。喧噪と怒号が渦巻くかのような渋滞のダッカを抜けてバスは北上する。都市部から農村部へ景色の移り変わりがあるものの、リキシャは依然幅をきかせて往来する。なにせ、信号や車線もないバングラデシュ。バスに突っ込んでくるリキシャワラーの男らしさ？制限速度も追い越し禁止も無関係な交通事情は正直恐ろしいものがあった。

OPAPRI到着

およそ2時間強バスに揺られてPAPRI到着。日本のNGOシャプラニールの地域活動センターが地元のNGOに移行した組織である。代表のバセッド氏は我々を心から歓迎してくれ、「日本人に支えられて続けてきた。」ICAとNGOのつながりが幸せ。地域の人々の生活を少しでも良くしていくことがねらい。」と語っていた。宿泊棟はトタン屋根とトタン壁、パイプベッドに蚊帳、夜は水シャワー(男子はランプを持参)というシチュエーションは正にキャンプのようであった。

○最貧困層グループの視察

A班とB班に分かれて、車で数分の距離の村に視察へ向かった。最貧困層グループとはいかなるものか。シャプラニールの当初からのスタッフであった女性が指導者として村の女性組織シヨミティに、継続的に保健指導、栄養指導を行っていた。PAPRIから僅かなお金を借りて牛を購入、育てて売却し返済する。利子もマイクロクレジットより安く、彼女らの生活水準に合わせて返済できる。自ら金を手にし、運用していく術や技術を身につける自信に溢れた女性達の姿に驚かされた。自らを poorest of poor と名乗る彼女たちの笑顔は屈託がなかった。



PAPRI 最貧困層グループ

○交流プログラム(青少年少女活動グループ)

夕方に施設に戻ったところ何やら子ども達がおめかしの様子。何だろうと思っていたら、予定より早めに交流があるとのこと。ヨサコイの練習も慌ただしくやって子ども達の歌や演奏に聴き入ること数時間？結構長かった。みんな暗い中でも一生懸命な姿が印象的。特にインドの歌謡ダンス「オーマイダーリンアイラブユー」はユーモラスで心と耳に焼き付いた。我々も無事にヨサコイを披露し、安堵したところに突如嵐がやってきて、会はお開き。でも子ども達のおかげでPAPRIの夜は楽しいひとときを過ごすことができた。

○おまけ・・・夜の交流活動？

食事後の水シャワーを男子は順番待ちしていたこともあって、野外で夜ふけるまで活動のふり返し等について現地ガイドのアロムさんと熱く語った。最後に見上げた満天の星空(未だ見たことのない星の数)が素敵な一日のフィナーレとなった。

4日目 8月12日(日)

コラム提供:岩手県立花巻農業高等学校 川村 ゆう子 実習助手

【現地 NGO 視察】

OPAPRI シヨミティ活動の視察(マイクロクレジット)

昨日同様、2班に分かれリキシャにて村へ移動。マイクロクレジットを実施している女性達に会うことができた。私達が伺ったとき、ちょうどPAPRIのフィールドワーカーが、貯金または返済のお金を集めているところであった。このフィールドワーカーは、彼女達にとって銀行員であり、時と



PAPRI マイクロクレジットグループ

して先生にもなる。牛の飼い方を教えたり、新しい情報も提供したりしてくれる。シヨミティでの活動は、経済的自立を助けるだけではなく、知識を共有し、互いに高めあう“学びの場”でもある。

私達の質問1つ1つに、身を乗りだし生き生きと答えるその姿に、思わずこちらも笑みがこぼれる。ある女性は、このシヨミティに入る10年前まで、子供を学校に入れることが出来なかった。しかし今では、田んぼを借り、トタン屋根の家にも住み、3食ご飯が食べられると語ってくれた。もちろん、今では子供に教育を受けさせることが出来る。何より、彼女達は家族の一員として、大切なサポーターになっているという責任が、自信と誇りになっているのだろう。

【母性保護サービス強化プロジェクト】

OPolash Union病院

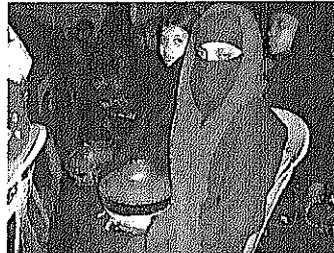
吉村専門家、JOCV永井隊員をはじめプロジェクトメンバーと合流。院長先生の案内で、病院を隅々まで見学することができた。

OPolash Danga Union 妊産婦のための地域セッション

バングラデシュでは、妊産婦死亡率・乳児死亡率が共に高い。このユニオンのチェアマンがこの事業に力を入れる理由も、2人のお姉さんを亡くされたことによる。バングラデシュでは、施設分娩が13%しか行われておらず、介助者の助産教育もほとんどなされていないというから、このプロジェクトは大変意味あるものだと感じた。

ONarsingdi母子福祉センター

このセンターは、県の病院から家族計画を専門に行う施設として独立したもの。そして、小児科・産科も合わせ持つ。避妊施術をすると、サリーやルンギがもらえるというが、ちょっと複雑な心境…。超人口過密国家のこの国ならではの策であろうか。私達も、訪問の記念にカラフルなマグカップを頂いた。



母子福祉センター



妊産婦のための地域セッション

OProject事務所

JICAプロジェクトスタッフと、お昼ご飯か、夕ご飯か！？おいしいトルカ리를囲みながら懇談。

OProject紹介

ダッカにあるホテルに戻り、吉村専門家よりプロジェクトの概要説明を受ける。

5日目 8月13日(月)

コラム提供:岩手県川井村立江繋小学校 佐藤 賢治 教諭

○ ダッカ市内公立小学校訪問

当初3日目の土曜日に視察する予定だったダッカ市内の公立小学校を訪問。児童数が2500人、それに対して教員が27人。1クラスの児童数が60人から85人となるという。私達は、1・2年すべての教室の授業を参観させていただいた。

子どもはどこも同じ。明るい笑顔で私達を歓迎してくれた。午前10時を過ぎると、それまで勉強していた1・2年生が一斉に下校。彼らに代わって、狭い校庭に待機していた3・4・5年生が校舎を埋め尽くす。その後の先生方との懇談では、教師数に対して児童数が多すぎることや教師の地位の低さ、政府からの予算の少なさなどが問題で、教育の質の向上が難しいとのことだった。

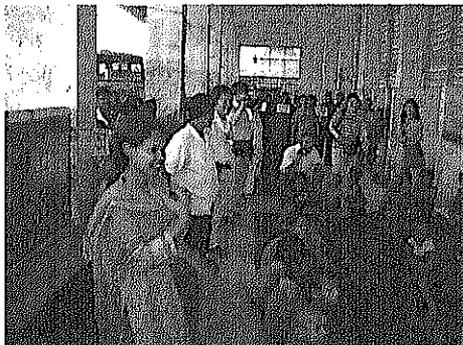


○ NGO視察「シャプラニール」のダッカ事務所へ

事務所前では、現地駐在員の小嶋淳史さんが私達を出迎えてくれた。シャプラニールは1970年代から活動してきた日本のNGOで、農村部の貧困層の相互扶助グループ「ショミティ」の育成や2000年から急速に深刻化してきた都市問題に伴って出現したストリート・チルドレンの支援などを現地のNGOと協力しながら行っている。私達はその活動の説明を受け、おいしい昼食(もちろんカレー)をごちそうになった。

○ 現地NGO視察「オポロジェヨ・バングラデシュ」

①青空教室



青空教室

私達は、「シャプラニール」の小嶋さんの案内で、バスターミナルに向かった。そこには、ストリート・チルドレンのために作られた青空学級があるのだ。使用しなくなったバスチケット売り場、その一角を借りて、「オポロジェヨ・バングラデシュ」が青空学級を開いている。ここでは、午前2時間、午後2時間、集団教育を受けたことのない子ども達に学校の授業の導入となるような授業を行っていた。そこで、学習意欲を持たせた子ども達は、次の段階へと進んでいける。

そこでは、かつて自らストリート・チルドレンだった15歳の少女が先生をしていた。生き生きとした彼女の目に私達は大きな希望を感じた。

つまらないと5分間じっとしていることさえ難しいという子ども達の前で私達は、汗をかきながらベンガル語で自己紹介をし、「幸せなら手をたたこう」や「大きな栗の木の下で」を振り付けつきで歌った。歌は日本語だったが、なんと子ども達は日本語で歌い、一緒に踊ってくれた。感動のひと時であった。

②ドロップインセンター

実は、ストリート・チルドレンといっても大きく分けて2つのタイプがある。昼は街頭で働いて、夜になるとスラム街に帰っていく子ども達と、24時間街頭で生活している子ども達である。そんなストリート・チルドレンが24時間利用できる立寄り所として作られたのがドロップインセンターである。そこには、日中で100人くらい、宿泊では50人くらいの子ども達が利用している。そこから学校に通うようになったという子ども達のロッカーを見せてもらった。教科書や制服をととても大切な宝物のように扱っていた子ども達が忘れられない。私達はそこの子ども達と日本から持っていった遊びで盛り上がった。シャボン玉や剣玉、風船・・・時間はあっという間に過ぎてしまった。でも、そこでの交流は決して忘れることのできない思い出となった。この施設は、9月3日(月)TBSのテレビ「世界の危機を救うお金の使い方」で宮崎あおいと兄が訪れていた施設である。

○「エクマツラ」の渡辺大樹さんとの出会い

ホテルに戻ってから夜には、「エクマツラ」の渡辺大樹さんとの出会いがあった。渡辺さんはダッカ大学の学

友とストリート・チルドレンの支援活動を進めてこられた方で、まさしくストリート・チルドレンの育ての親とも言える方だ。その運営資金のためにわずかながら私達も協力させていただいた。

このように、5日目はとても密度の濃い、そして、感動の多い1日だった。

6日目 8月14日(火)

コラム提供:宮城県古川工業高等学校 三浦 克洋 教諭

【JICAプロジェクト視察】ダッカ廃棄物管理能力強化プロジェクト

○廃棄物収集状況

街中にある収集場の状況を見学。各箇所にある廃棄物コンテナは一日に一度、回収されるらしいのだが、バングラデシュの高温多湿な気候により腐敗が早く、脳まで刺激するような匂いが漂う。このヘヴィな匂いを感じなければバングラデシュでの楽しさは半減だったのではないだろうか。

○サイバダット クリーナーズ コロニー



クリーナーズ コロニー

“クリーナーズコロニー”ってちょっとカッコいい響きではあるが、清掃員の居住地域。ヒンズー教の清掃員の生活環境区を見学。始めはヒンズー教の清掃員だけだったようだが、イスラム教徒も新たに参入してきているようだ。コロニーの裏にはバングラデシュには数少ないキリスト教徒のお墓もあり何か複雑な事情を抱えている様子。宗教的な面でもなにかたならぬことでも起こりそうな予感。

○リサイクル業者店舗

リサイクルできる廃棄物、ガラス、プラスチック、紙、マテリアルなどを売買している業者店舗。町中に廃棄物が溢れていることに反し、バングラデシュにおけるリサイクル回収率は高い。リサイクルできる廃棄物をウェイストピッカーにより分類され、業者へ。リサイクル回収は日本でもまだまだ徹底できる場所、考えさせられることがたくさんあった。

○マトワイル最終廃棄処分場

ダッカ市内唯一の廃棄物の公式最終処分場。ダッカ市内の廃棄物がここに集められる。もともとは投棄しているだけだったようだが、現在は衛生理め立て方式となっている。ここで出会ったウェイストピッカーのムスリマちゃん(9歳)。彼女は最終処分場で拾った有価物をリサイクル業者に販売して生計を立てている。サンダルは履いているものの裸足同然での作業や衛生環境により、彼女は常に感染症などの危険にさらされている。

○プロジェクト事務所(ダッカ市役所—DCC)

ダッカ市役所内の廃棄物管理局に設けられている廃棄物管理能力強化プロジェクト事務所。バングラデシュでは廃棄物をその辺に捨てる習慣があるという。その通りで町を歩けば大人も子供もみんなポイ捨てをしている。環境意識の低いバングラデシュ人に環境教育を施そうというプロジェクト。JICA・協力隊の方々の取り組んでいる気の遠くなるような活動内容に参加教員一同、脱帽。



廃棄物処理場

○資料収集 アーロン

世界的に最も有名なバングラデシュのNGO・BRACが運営する店舗。技術訓練、手工芸品の生産と販売、法的知識の普及など、様々な側面から、農村の貧困女性を支援している。店舗で販売されるこれらの商品は、きわめて洗練されたものばかり。私たち日本人にとっても大変魅力的なものが多く思わず時間さえも忘れてしまう。

現在、バングラデシュではダッカへの人口集中が急速に進んでおり、それに伴う廃棄物、大気汚染などが社会的課題となっている。1日の一人当たりの廃棄物排出量バングラデシュ…500g、先進国？日本…1000g 日本にも同じような時代があったのかもしれない。

また、現在の日本でも過剰包装などによる廃棄物の多量化なども考えさせられる一日となった。

7日目 8月15日(水)

コラム提供:馬場 由佳子 福島県立富岡養護学校 教諭

【青年海外協力隊(JOCV)活動視察】

バングラデシュでは2007年8月現在47名のJOCVと2名のシニア海外ボランティアが活動している。教育分野は初等教育を中心に支援しており、JOCVは6名派遣され、うち2名が現職教員特別参加制度での参加である。

この日は、首都ダッカ近郊のガジプール県において、JOCVが活動している現場を視察した。隊員が活動している様子や学校現場を見られた貴重な一日だった。

○理数科教師 前川幸範隊員

日本のキリスト教団体を母体としたNGOが、バングラデシュ国内で6県70校を運営している。前川隊員はダッカの事務所を拠点として、そのうち14校を巡回指導しているようだ。今回はその中の一つであるプーパイル郡NGO運営学校へ。長屋のような建物をジュートで作った仕切りで区切った5つの教室で1～3年生が学んでいる。ひさしの下では幼稚園の授業も行われていた。先生はいずれもヒンズー教徒だという女性ばかり。ちなみに児童はイスラム教が多いとのこと。

1年生の授業を見せていただいた。ニケタの引き算を行っている。先生が黒板に問題を書き児童を指名する。児童は、丸や棒、おはじきなどをかいて数えながら答えを導きだしていた。教科書中心、暗記中心の教授法が主で児童の学習達成度が低い(小学校1.6%)と聞いていたが、児童自身が考えている様子に感心した。前川隊員は、普段から教材の大切さを伝えているそうで、先日現地教員が放課後教材を作っている姿を初めて見かけたという言葉に、私もうれしく感じた。

○小学校教諭 猪俣宗哉隊員(現職教員特別参加制度による)

カリヤコイル郡URCロシプールモデル公立小学校へ。URC(郡リソースセンター)は小学校教員の研修機関で、ここでは小学校が併設されている。教員の意欲が高いなどの理由で、モデルスクールとして指定されているようだ。

教員は12名。やはり女性の教員が多いが、男性教員もいた。児童数554名。教室は12室あり、1～5年生の算数、理科、社会、英語、ベンガル語(国語)などの授業を見学する。日本の学校教育と比べるとまだまだ足りない部分があるかもしれないが、児童が興味を持てるように絵や写真、手遊び歌を取り入れたすばらしい授業ばかりだった。児童も姿勢よくいすに座り、集中して学んでいた。

授業を見て改善点などあればぜひ教えてほしいと、私達にアンケートをお願いされた。さらに授業後、現地教員との座談会では「サゼスチョン(提案は)?」と何回も聞かれ、私達の感想や提案にうなずく姿によりよい授業を作ろうとする意気込みが感じられた。これは、先生方の意識の高さはもちろん、バングラデシュの教育向上に奮闘する猪俣隊員の存在が大きいことでもあるのではと思った。歌や踊りでの歓迎、昼食までごちそうになり、この国のおもてなしの心に感激。



土の上に座り、一生懸命学ぶ



現地教員との座談会。写真中央が猪俣隊員

8日目 8月16日(木)

コラム提供: 青森県立青森商業高等学校 張間 亮 教諭

○遂に病院に…

朝6時、隣の部屋からのSOS。皆体調を崩していたが、遂に病院に行く事態。しかし、そこでもバングラデシュと日本のつながりがあった。診てもらったのはヤマガタ病院。山形大学医学部に留学していた方が開業し、そう名付けたのだった。この日のうちにもう一人お世話になるのだが、少なくとも1日1人の日本人が診察を受けるとの事。異国の地で日本語がわかる医師に診てもらえるありがたさ。留学を受け入れることで、やがては日本人が助けられるということを実感する出来事であった。

○大使館訪問

現地 JICA 事務所の河田さんのいつもと違う服装、いつもにも増して綿密な段取りに団長としての緊張が高まる。しかし、井上大使には大変親しく接していただき、懇談では話が尽きなかった。近隣諸国との関係からバングラデシュを理解する点など、大変参考になるものであった。大使が最後に述べられたように、我々は今回の研修によりバングラデシュという新たな日本を見る鏡を手に入れたのだった。



井上大使(前列中央)と集合写真
前列左は現地 JICA 事務所の萱島所長